

女子学生による臭気識別能力における香りの種類の影響

共立女子大家政 ○熊谷伸子 芳住邦雄

1. 現代の生活における香りの占める重要性は、近年増しつづるといえる。好悪を含めた多くの種類の香りに囲まれて日常生活を送るのが現実であろうが、そうした環境において私達の香りの識別力はいかなるものかは、香りに関わる快適性を確保するための不可欠な情報と言える。

従来香りの研究は、無臭状態に順じた実験条件で検討されてきているが、日常生活そのままの条件下での識別能力についての研究は乏しい現状にある。

2. 実験においては、T&Tオルファクトメーターの中から、 β -フェニルエチルアルコール（花のにおい）、 γ -ウンデカラクトン（熟した果実臭）、イソ吉草酸（汗くさいにおい）およびスカトール（かび臭いにおい）の4種類の基準臭を選び、濃度を 10^{-5} から 10^{-7} の範囲で段階的に変化させて、5-2法により被験者に香りの有無を判定させた。被験者は、20~23歳の女子大学生延べ30名を用いた。被験者の化粧や食事は日常のままとし、特に制限を加えなかった。

3. 女子学生の嫌うと見込まれる汗とかびを代表する香りにおいては、濃度を 10^{-7} (W/W) に下げても、識別率は90%以上であった。これは、岩崎ら(1983)の19~60歳男女における平均識別率12%および55%に比較して極めて鋭敏であると言える。女子学生の過剰なまでの清潔志向の一端をうかがわせるものと考えられる。一方、花のにおいと熟した果実臭では、 10^{-8} (W/W) でも大幅に識別能力が低下することが認められ好ましい香りでは、かえって女子学生の感覚は鈍いことがうかがわれた。